

博士課程教育リーディングプログラム 平成26年度プログラム実施状況報告書

採択年度	平成25年度		
申請大学名	京都大学	申請大学長名	山極 寿一
申請類型	オンリーワン型	プログラム責任者名	北野 正雄
整理番号	U04	プログラムコーディネーター名	松沢 哲郎
プログラム名	霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院		

<プログラム進捗状況概要>

1. プログラムの目的・大学の改革構想

霊長類学は日本から世界に向けて発信し日本が世界の第一線を保持してきた稀有な学問である。霊長類学を基盤にして、大型の絶滅危惧種を対象にした「ワイルドライフサイエンス」という新興の学問分野を確立しつつある。そこで必要とされているのは、フィールドワークを共通基盤として、人間のこころ・からだ・くらし・ゲノムといった本性全体の理解を深めつつ、「地球社会の調和ある共存」という京都大学の憲章が掲げる理念を実現する実践活動である。ワイルドライフすなわち生き物すべての生存の連環を科学する分野で、フィールドワークによって培った「知行合一」の精神によって、学問と実践をつなぐグローバルリーダーの人材育成がいまこそ求められている。霊長類学を基盤とした研究が学問の最先端を担っていながら、欧米にあって日本に明確に欠けているものが3つある。①生物保全の専門家として国際機関・NGO等で働く若手人材の養成、②博物館ならびに動物園・水族館等におけるキュレーター養成とフィールドミュージアムの実現、③一国まるごとを対象としたアウトリーチ活動すなわち長い歳月をかけて特定の国との結びつきを深める活動、である。その3つの欠陥を逆に将来の伸びしろと考えたい。研究のための研究ではない。学問・教育・実践の新しいニッチとして、国際機関やNGOで、博物館や動物園等で、そして諸外国において、日本の眼に見える貢献を果たす人材を育成したい。なお、日本は先進国で唯一、霊長類が住む国であり、近年、野生のクマ、シカ、カモシカ、ニホンザルが人とのあつれきを増加させ、各地で対策に追われている。このような実態を踏まえ、国内のワイルドライフに対して世界に誇れる管理体制の構築を行う人材の育成にも力点を置く。

2. プログラムの進捗状況

平成25年10月1日に採択され発足した当プログラムは、日本の他の大学に類例のない、フィールドワークを基礎とするプログラムである。学内の研究者のみならず、外交官、地域行政、法曹、国際NGO、博物館関係者などからなるプログラム分担者をそろえ、3つの出口（「国連や国際NGOで活躍する生態保全の専門家」「博物館・動物園・水族館で活躍するキュレーター（博士学芸員）」「長い歳月をかけて一国丸ごとを対象としたアウトリーチ」）を明確に意識した体制を構築した。

平成26年度のプログラムの進捗状況は、大別して4つにまとめられる。①履修生の受入開始に伴うカリキュラムの整備と運営、②連携体制の維持強化、③出口を見据えた履修生の自主性の涵養、④優秀な履修生の継続的な獲得に向けたプログラム広報、である。以下に詳述する。

第1は、平成26年度からの履修生の受入開始に伴うカリキュラムの整備とその運営である。必修の8実習「インターラボ」「幸島実習」「屋久島実習」「ゲノム実習」「比較認知科学実習」「笹ヶ峰実習」「動物園・博物館実習」「自主フィールドワーク実習」のカリキュラムの整備をおこない、日程を逐次HPに掲げ、それぞれの実習の意図を詳述して周知・広報につとめた。また座学として、英語が公用語の「アシュラ・セミナー」を17回、公用語を定めない「ブッダ・セミナー」を4回実施した。これらの実習・セミナーは複数言語を使用しており、特に実習は年に2回ずつ実施することで、履修生の所属研究科の講義の受講や自主的なフィールドワークの妨げとならないよう配慮した。また、実習実施の拠点の整備とその維持にも力を注いだ。具体的には、チンパンジーとボノボを擁する熊本サンクチュアリ、幸島の野生ニホンザル施設、屋久島の野生のサルとシカの調査施設、公益財団法人日本モンキーセンターなどである。国外では、アフリカ、中南米、インド・東南アジアという3つの熱帯林を中心とした野生動物のホットスポットが挙げられる。履修生は、L1からすぐに、これらの海外拠点で2～6ヵ月の中長期にわたって自主企画のフィールドワークをおこなった。あわせて、履修生を広く深く支援する教育研究体制を構築した。特定教員5名をはじめ、履修生の身近でファシリテーターとして支える研究員、語学に堪能な事務職員を各拠点に配置し、協力して履修生をサポートした。

第2は、プログラム実施・運営のための連携体制の維持強化である。プログラムの意思決定は、学内分担者の全員からなる月例の協議員会で、その中枢としてヘッドクォーター（HQ）制度をとった。コーディネーターを含む8名のHQがいて、諸事の運営を審議し、それを実現する事務組織をとってPWS支援室を京都の野生動物センターに置いた。多数の分担者が、犬山と京都、さらには熊本や幸島というフィールド拠点に分散しているため、月例の協議員会は5元中継のTV会議で開催し、面談と同様の臨場感をもって審議している。同様の理由により、プログラムの方針・運営状況・カリキュラム・成果・履修生の動向などについて、対内外の情報・広報は、すべて一元的にHP（<http://www.wildlife-science.org/>）に集約することとした。スタッフ専用の閲覧ページも含めて、HPそのものが活動の要であり、リアルタイムに日々更新される。教員も履修生も全員がフィールドワーカーであり、世界各地に飛びまわっているため、いつでもどこでも同じ情報にアクセスできるようにした。このHPを活用することで、月例の協議員会の資料もPDFで用意でき、ペーパーレス会議を実現して、身近なところから森林資源の保護につなげている。さらに、年2回開催（平成26年度は8月29-30日と3月5-8日）のシンポジウムで、履修生や外国人協力者（IC）も含めた100名超のプログラム関係者が一堂に会することで、プログラムの方向性や進捗状況を確認し、連携強化を図った。なお、年度末のシンポジウムは平成27年度の履修生の選抜試験も兼ねており、平成26年度を上回る数の応募者があった。加えて、日本学術会議・基礎生物学委員会・統合生物学委員会合同ワイルドライフサイエンス分科会を発足し、プログラムコーディネーターが委員長を務めることで、長期的かつ学際的な評価・支援基盤を固めた。屋久島学ソサエティへの協力をはじめとして、国内のワイルドライフサイエンスの担い手との連携も進めた。

第3は、3つの出口を見据えた履修生の自主性の涵養である。必修の「自主フィールドワーク実習」では、履修生が自主企画の海外研修をおこなうことで、自発的なプランニング能力の向上を図り、出口となる保全の専門家や、キュレーターや、アウトリーチ活動の実践者の育成につなげている。平成26年度のL1は、コンゴ・ウガンダ・ブラジルなどに数ヵ月以上滞在してフィールドワークを実施し、現地の研究機関との交渉や現地語の習得も含めて、人間のこころ・からだ・くらし・ゲノムの包括的理解に努めた。個人的なフィールドワークに限らず、大学院生のイニシアチブによる自主企画の集団実習も奨励し、運営能力・実践能力の涵養を図った。具体的には、8月7-17日の「国際霊長類学会に合わせたベトナム研修」、8月12-14日の「丸の内キッズジャンボリー」、3月12-14日の「小豆島実習」である。

第4は、優秀な履修生の継続的な獲得に向けた取り組みである。春秋の国際入試によって留学生に門戸を開いた。また、国際学会にブースを出して、国際的な広報活動を実践した。HPの内容を充実させて、HPを見れば本プログラムのすべてがわかるようにした。学内外のプログラム説明会も複数回実施した。